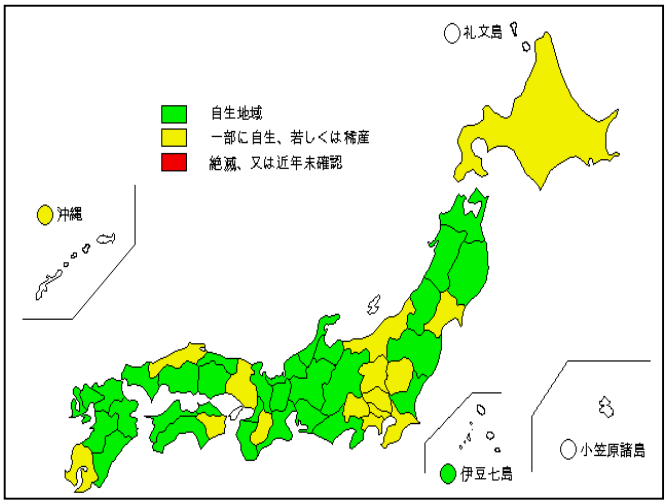
#70

カキラン（スズラン）

Epipactis thunbergii

カキラン（愛知県北部高地　09.7/11）

全国の湿地に自生する大型の地生蘭です。40～100cmの背丈になり、中部地方の低地では5～6月頃にその名の通り柿色の花を複数輪うつむき加減に咲かせます。このうつむいている姿から「スズラン」の別名がありますが、ユリ科のスズランと混同してしまうためかあまり一般的ではありません。湿地性の蘭の多くは小型であり、他の植物との競合を避け他の大型植物が育たないような貧栄養土壌で自生しますが、カキランは草丈が高いため湿地の脇の草むらや池のほとりなどでササや葦などの大型植物に混じっても押し負けずに成長することができます。ゆえに、湿地中央にはトキソウやサギソウ、ミミカキグサやモウセンゴケなどが生え、湿地を取り囲む藪の中などにカキランが咲いていることが多いです。草丈の割に花1輪は小型ですが、柿色の花弁にピンクのリップは大変美しく日本人好みの控えめな渋さがあり、また、左右対称に生えるやや硬質のしっかりとした草姿からも非常に観賞価値の高い蘭です。



全国の湿地に自生します。

カキラン（愛知県北部高地　09.7/11）

昔は自生量も多く、田んぼのあぜ道や河川敷き、池のほとり、湿った草むらなどどこにでも普通に見られた種ですが、田んぼの耕作放棄や宅地化、道路整備などで激減し、今では人為的に保護された管理湿地以外ではほとんど出会うことができません。大型で目立ち、美しいことから盗掘のターゲットにもなっています。一つの自生地での自生量は数株～多くて100株程度ともともと少ないため、簡単に絶滅してしまう危険のある種です。一度数株まで減ってしまうとそう簡単に増えることはできないので、たとえ金銭目的でなく個人で楽しむために一株持ち帰り、という程度のささいなことでも何卒自重願います。本来は大変強い蘭ですので、人為的なダメージさえ与えなければ、自生量は必ず回復するはずです。

Document and photo by LittleFlower 2009

僅かではありますが商用生産も行われているため入手は容易です。ちょっと品揃えの良い野草店などで普通に入手できます。但し、明らかな盗掘品と思われる場合には購入はお控え下さい。売れるとなればまた新たな盗掘を生んでしまう為です。 栽培も容易です。十分な潅水と日照さえ確保できれば地植えでも鉢植えでもプランターでもOKです。理想的な栽培環境はズバリ「田んぼのあぜ道」です。ススキや笹など大きな植物を周りから除去してあげる程度の世話で年々増えていきます。鉢植えだと背丈も低く作りこむ事ができ植替えも楽ですが、効率よく増やすためにはやはり適した環境に地植えしてあげることです。冬季は地上部は枯死し越冬します。環境さえ合えば精力的に株増殖をするため、家庭では実生増殖はあまり行われませんが、種子の結実率も良いため実生増殖も期待できます。但し、実生株の開花までは3年ほどかかるようです。

カキラン（愛知県奥三河　09.7/11）

カキランの群生（愛知県北部高地　09.7/11）

近縁種としては、太平洋側の海岸沿いに自生するハマカキラン（固体によってはマルバハマカキランと区別されることもある）、山地に自生し花は緑色で目立たないアオスズラン（エゾスズラン）、九州南部に稀産し、カキランのリップが花弁化したイソマカキランなどがあります。また、リップまで黄色に染まる固体をキバナカキラン、葉にアントシアニンが多く含まれ濃紫色を帯びる固体をカラスバカキランなどと区別することもあります。

カキランの草姿(愛知県東三河09.7/4)

カキラン（愛知県奥三河　09.7/11）

Document and photo by LittleFlower 2009